

希少生物の産卵場所確保

レンコン畑に魚道設置

鳴門・斎藤さん



レンコン畑の一角に設置された魚道を整える斎藤政明さん
＝鳴門市大津町段関

鳴門市大津町段関の農業斎藤政明さん(六六)のレンコン畑に、用水と畑を結ぶ魚道が設置された。国のレッドデータブック絶滅危惧(きん)Ⅰ種に分類されるコイ科の淡水魚カワバタモロコや、希少種のメダカの産卵場所を確保するのが目的。用水から畑への行き来を可能にし、水生動物に安全な産卵場所を提供する県内初の試み。

用水からの遡上手助け

魚道は、長さ約百五十メートル、幅約十五メートル、高さ約二十メートルの杉材で今年三月、畑(十五畝)に設置した。遡上(そじょう)する生き物が水流で戻されないよう溝付きの管を入れた。魚道は畑の水位より高く設け、普段は用水への水の流出はないが、降雨などで畑の水位が上がるると魚道に水が流れ、用水の生き物が遡上できるようにする。

同市大津町は全国有数のレンコン産地。斎藤さんは約四十年間、使う農薬量を最小限に抑え、有機肥料を使いながら環境に配慮した農業を模索してきた。畑の隣を流れる農業用水には、ナマズやドジョウ、カワエビなど

二十数種が生息。二〇〇四年には、絶滅危惧Ⅰ種に分類されるカワバタモロコが県内で五十八年ぶりに見つかった。

希少生物の保護に何かできないかと考えた斎藤さんは昨秋、鳴門藍住農業支援センター(藍住町東中富)に相談。魚道の設置で、用水の生き物に産卵場所を提供する手法を知り、同センターも支援する形で始まった。

畑は生き物の餌となる微生物が豊富で、七月になるとレンコンの葉が畑を覆う。カワバタモロコの産卵期は六―七月で、カラスなどに食べられる心配もなくなるという。

斎藤さんの妻で県指導

農業士の倫子さんは「生き物が産卵場所を選ぶ畑は健康な証拠。生き物と共存できる農業を目指します」。同センターは「どれくらいの種が遡上するかは未知数。今後の動きをじっくり見守りたい」と期待している。